



126号

2007/9 / 1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



バンドネオンの奏でるメロディは、不思議に心落ち着くのです アルゼンチン 2007年正月 嘉陽ひろこ

「わんりい」126号の主な目次

北京雑感その(17)「北京オリンピック」	2
私の調べた四字熟語(15)「天衣無縫」	3
9月の歌・「在水一方」の歌詞	3
内モンゴル大草原での「夏休み日記」	4
ものしりノート(2)「王という文字について」	6
紹興・杭州に秋瑾を訪ねて	7
松本杏花さんの句集「余情残心」より	7
四姑娘山・写真だより(4)	8
四姑娘山・花の旅	9
私の四川省一人旅(9)(稻城③)	10
ブエノスアイレス・南米のパリに行く(1)	12
スリランカ紹介(11)「コロンボでも蛍が見られる」	13
アフリカとの出会い(19)「変わり行くアフリカの自然」	14
「インドネシアのこと」	15
中国を読む(44)「ドキュメンタリー之力」女たちがつくるアジア	16
「わんりい」掲示板	16

♪「中国語で歌おう!会」6・7月の歌♪

「在水一方」(作曲者:林家慶 作詞者:剥辨)

テレサテン愛唱歌(歌詞:「わんりい」9月号3P)

於:まちだ中央公民館7F・第一音楽室

JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、
小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

9月14日(金) 19:00~20:30

指導:趙鳳葵 録音機をお持ち下さい。

●「中国で歌おう!会」参加者募集中!どなたもお気軽に参加下さい。

●「中国で歌おう!会」於:まちだ中央公民館

毎月1回、主として第3金曜日開催(変更あります)

19:00~20:30 会費(月1回):1,500円 体験無料

*初めてご参加の方は、会場、日時など「わんりい」事務局へお問合せ下さい。

車で走っていて、オリンピックまでの日数をカウントダウンするボードを目にしました。日数は383日、もう400日を切っていました。どうりで、最近のテレビ・ラジオには“奥运会”が氾濫しています。

街中で、高いビルや道路の建設が急ピッチで進んでいます。地下鉄の駅が予定されている所は、さすがに地上部分の工事が終わり、道路はかなりすっきりしてきましたが、地下では工事が続いていることでしょう。

今、私が興味を持っているのは、前門の改修工事です。去年の秋から、前門は部分的に大きな改修工事があった、随分様子が変わりましたが、今年7月に来してみると、何と、前門大街が高いフェンスで閉鎖されているのです。地下鉄前門駅の西側階段を昇ると、目の前に大きな通りが出来て、南のほうへ走っています。そこから東の方へ、今まで小さなお店がひしめいていたあたりは、すっかり整備されて、前門大街の工事フェンスまで、緑地帯が出来上がっています。大街を越えて東へ行くと、暫くは工事フェンスが続き、北京旧駅の手前にも新しい、南からの広い道が出来て、前門東路と名前が出ていました。そしてその角にも、広い緑地が出来ています。

大街の西側の工事フェンスに、「←大柵欄」と赤ペンキの殴り書きを見つけて入っていくと、やっと見覚えのある、大街に平行した細い路地に出ました。その道を歩いて大柵欄まで行くと、東は通行止め。大街に通じていた道がフェンスで囲われ、そこから覗くと大街の商店は皆取り壊されています。全聚徳や都一処など、お馴染みの店が影も形もありません。慌てて振り向くと、西方向には、同仁堂、張一元、天福銘茶など見慣れた店がそのまま残っていて、やっと、ほっとします。

大柵欄を西に暫く歩くと、今まで無かった大きな道に出ました。その道を隔てて、細い路地があり、どうやら、それが琉璃廠へ続く道ようです。大きな道を北に歩くと、地下鉄前門駅西側階段へ出て、この通りが、昇ってきて初めて目にした大通りだと分かりました。ここには、前門西路と書いてありました。

前門大街のフェンスには、綺麗な写真のような完成予想図が描いてあるのですが、どうなるのか、私には想像出来ませんでした。しかしここまで歩いてきて、私なりの勝手な予想図を創ることが出来ました。前門大街は車の通行を禁止して、王府井のように歩行者天国にし、大柵欄の東は、大街を越えて、前門東路まで抜ける道を作るようです。

予想が当たるかどうかは別にして、私は、この工事が

オリンピックに間に合うのか、心配しています。前門大街はまだ瓦礫の山です。これから瓦礫を片付けて、2, 3階建てで揃えとしても、建物を立て、商店・食堂が入って、営業の準備が出来るのでしょうか。ま、中国の人達は、間に合わせるのが得意なようですけれど、余りいい加減な工事はして欲しくないと、北京の好きな老婆心から思っています。

聞くところによると、世界的ブランドメーカーも含めて、大街に店を出すための入札が行われたということです。前門にブランドショップなんて、浅草にティファニーのお店が出来るようなもので、似合わないと思うのは、私の偏見でしょうか？ いずれにしても、今までとは違う前門大街が出現します。前門も、王府井と同じ運命をたどるとしたらちょっと残念ですが、仕方ありませんね。昔の前門の雰囲気は無くなるかも知れませんが、前門は前門ですから、我慢しましょうか。

それにしても、去年から今年にかけての前門は、前門ではありません。観光案内等で、北京の代表的な買い物スポットとして紹介されて、楽しみに訪れた観光客も多いと思いますが、昨今の前門を見てガッカリしたことでしょう。他人事ながら、「時期が悪かった」で済ませるのは申し訳ないような気がします。

街中のビルなどは、たとえオリンピックに間に合わなくても、余り被害はありませんが、北京の代表的観光地前門が未完成だったら、商店の損害は勿論、観光客も随分ガッカリするでしょう。でも、北京市はちゃんと間に合わせるのでしょう。「余計なお世話だ」と言われそうです。

オリンピックと言えば、もう一つ、密かな心配があります。それはお天気です。北京の人達は、オリンピックを9月にやれば良いのと思っています。北京の9月と言えば、皆様ご存知の“秋高气爽”ですから、東京オリンピックと同じように、快晴の開会式が期待できたのですが、実際の開幕は8月8日です。聞くところによると、北京市は9月の開催を希望したのですが、IOCが、世界のプロスポーツのシーズンを勘案して、8月の開催を強硬に主張したそうです。

因みに、今年の北京の天気を見ると、7月25日に晴れた後、8月7日までずっと曇りまたは雨が続いています。合間に陽が射すことはあっても、一日すっきり晴れると言うことはありませんでした。若し、来年もこんなお天気だったら、ちょっと気分がそがれるでしょうね。

私達は、例えば新進の若いスターなどが、怖いもの知らずに自由気ままに振舞っている様子を見て、「あの娘の振る舞いは天衣無縫過ぎて、ちょっとひやひやするなあ。」と評してみたり、或いは、会社や組織の中で、周囲を気にせず自分の思うことを口にし、且つ行動をしている人を見て「あの天衣無縫な人柄が却って彼の魅力なのかも」などと言ったりしますが、「天衣無縫」はこのように使われています。

早速辞書を調べて見ました。

三省堂「現代国語」には、「①詩や絵などが、わざとらしさがなく、いかにもしげんで、しかも完全であること。②かざりけがなく、思いのままにふるまうこと。」

小学館「中日辞典」では、「天衣无縫 tiānyiwúfèng 天女の衣には縫い目がない。(転じて)物事がいささかのすきもなく完全であることのとえ。天衣無縫」と載っています。どちらかという、②の意味合いからの用法が多いように思います。

出典は、『太平広記』(注)巻68にある『靈怪集』です。調べてみますと、何と天の川の織女姫が浮気をしたという話なのです。

唐の時代、郭翰 かくかん という青年がいました。既に両親を亡くしていましたが、俗塵に汚されることもなく、清廉潔白な教養のある好青年として勉学にいそんでいました。そんな夏のある夜半、寝台で涼んでいた郭翰の前に、天上から2人の侍女を従えた、世にも稀な美女が舞い降りてきたのです。黒い絹の衣に、霜のような薄絹の袖なしを着、緑の鳳凰の冠をかぶり、雲形の模様を刺繍した靴を履いています。

まさしく天界の仙女であろうと思われ、連れてくる侍女も見たこともないような美女でした。驚いた郭翰は、彼女こそ仙女であろうと思い、足元にひれ伏しましたが、美女は

「私は天上の織女です。夫の牽牛と別れて久しく、寂しさのあまりうつ病にかかってしまいました。そこで天帝のお許しを得て、しばらく下界に保養にまいりました。あなたさまの俗塵を避けたお暮らしぶりに心動かされ、お慕い申し上げるようになりました。どうぞ私と契りを結ばせていただきたくまかりこした次第です」と言うのです。

「なんともったいないこと！」郭翰が恐縮している間に、これも美しい侍女たちがさっさと寝台を調べて、郭翰の手を持って寝台に誘うと、美女も上衣を脱いで寝台に横たわりました。ここから先は読者の皆様のご想像にお任せすることにいたします。

美女は夜明けとともに帰って行きましたが、それから毎晩のように郭翰のもとに通ってくるのです。そしてある日、郭翰は美女の着ている衣服には縫い目や接合部が全くないということに気が付きました。

不思議に思った郭翰が寝物語に美女にそのことを尋ねると、美女は「天界では衣は元々針と糸で作るものではなく、布が自然に着る者たちの体に合わせて衣服となるの

で、縫い目は無いのです。」と答えました。そこから「天衣無縫」という熟語が生まれたといわれます。

このままでしたら何の変哲もない四字熟語なのですが、時代が下るにつれ、意味がだんだん変化していったようで、天衣無縫が自由自在に天人の体に合わせて衣服になるということから、天真爛漫と同じ意味で、人柄などが無邪気で素直なさまとなりました。さらに、天衣無縫は人の作為によらないことから、詩文などが、「自然な出来栄で技巧をこらした跡がなく、完璧に美しい」というように、褒める意味として使われるようになりました。

さて、こういうことが1年ほど続いたある夜、美女は郭翰の手をとって言いました。

「天帝にお許しをいただいた期限がとうとう来てしまいました。今宵をかざりにあなたとお別れしなくてはなりません。」

と泣き崩れました。二人は朝まで眠らずに別れを惜しみ、翌朝美女は振り返り振り返り天に帰っていきました。

それから1年ほどして侍女が一度だけ便りをとどけてきましたが、その後は全く音信不通になってしまいました。それからの郭翰は、この世のどんな美女をみても心をうごかされることなくってしまいました。家系を絶やさぬようにといいやいや妻をもらったものの、どうにも気に入らず、夫婦仲も悪く、結局子も出来ぬままでした。その後郭翰は侍御史の官職にまで就いて亡くなったということです。

(注)太平広記：

北宋時代に成立した類書のひとつ。『太平御覧』、『文苑英華』、『冊府元龜』とあわせて四大書と称せられる。太宗の勅命を奉じて李昉ら12名が太平興国2年(977年)から翌3年(978年)にかけて編纂したもので、全500巻、目録10巻。出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

「私」が調べた四字熟語 15

天衣無縫(てんいむほう)

三澤 統

zài shuǐ yī fāng
在水一方

作曲：林家慶
作詞：剥辨

lǜ cǎo cāngcāng bái wù mángmáng
绿草苍苍白雾茫茫
lǜ cǎo qiān bái wù mí lí
绿草萋萋白雾迷离

yǒu wèi jiā rén zài shuǐ yī fāng
有位佳人在水一方
yǒu wèi jiā rén kào shuǐ ér jū
有位佳人靠水儿居

wǒ yuàn nǐ liú ér shàng
我愿逆流而上
wú nài qián yǒu xiǎn tān
无奈前有险滩

yī wēi zài tā shēn páng
依偎在她身旁
dào lù yuǎn yuǎn yòu zhǎng
道路又远又长

wǒ yuàn shùn liú ér xià
我愿顺流而下
què jiàn yī xī fǎng fó
却见依稀仿佛

zhǒu xún tā de fāng xiāng
找寻她的方向
tā zài shuǐ de zhōng yāng
她在水的中央

wǒ yuàn nǐ liú ér shàng
我愿逆流而上
wú nài qián yǒu xiǎn tān
无奈前有险滩

yǔ tā qīng yán xì yǔ
与她轻言细语
dào lù qū zhé wú yǐ
道路曲折无已

wǒ yuàn shùn liú ér xià
我愿顺流而下
què jiàn yī xī fǎng fó
却见依稀仿佛

zhǒu xún tā de zōng jī
找寻她的踪迹
tā zài shuǐ de lì lì
她在水的伫立

lǜ cǎo cāngcāng bái wù mángmáng
绿草苍苍白雾茫茫
lǜ cǎo qiān bái wù mí lí
绿草萋萋白雾迷离

yǒu wèi jiā rén zài shuǐ yī fāng
有位佳人在水一方
yǒu wèi jiā rén kào shuǐ ér jū
有位佳人靠水儿居

内モンゴル大草原の別荘滞在と‘わりい’植樹地を訪ねた夏休み日記

渡里栄一

●7月28日(1日目) 内モンゴルは10年振りで3回目となる。今回は内モンゴル出身の馬頭琴演奏者・チ・ブルグッドさんの別荘を訪問し、乗馬、星座観察、馬頭琴等も楽しむ予定だ。私は別に‘わりい’植樹の現状を調べる「役目」を持っていた。別荘は内モンゴルでは美しいことで屈指の西ウジウムチンの大草原にある。

北京国際空港にブルグッドさんと通訳の内モンゴル大学の先生のチョルモンさんが迎えに来てくれていた。北京から我々は汽車でフフホトに向うのだ。

北京西駅は混んでいた。専用休憩室で時間待ちした後、ホームに出たが、そこで2つ面白いものを見た。一つは乗用車がホームにまでVIPを乗せてくるもの。ホームを歩くのが少し怖い。もう一つは隣のホームに青藏鉄道の青い列車を発見した。後でダイヤを調べると、北京西駅21:30発→拉薩2日後20:58着とある。3年前に行ったばかりだが、西藏に行きたい誘惑に駆られる。

19時55分に呼和浩特内モンゴル自治区の区都)に向けて列車(K89)は出発した。

●7月29日(2日目) 目がさめると、車窓は蜿蜒と続く草原に一変していた。人や文明の利器はほとんど見えぬ電線や電話線が伸びているばかりだ。さあ、「草原の国」の始まりだ。

十年ぶりの街は変貌していた。7時に呼和浩特駅到着。日中は呼和浩特で過ごす。夜10時、今度は西ウジウムチン草原の入口・錫林浩特行きの汽車(N281)に乗る。ちなみに列車内に掲示されていた呼和浩特から錫林浩特迄の駅名と時間は次の通り。

呼和浩特発22:00→0:21包棘0:21→0:14焦寧南0:29→商都→2:40化徳2:42→4:05正鑲白旗4:13→5:25桑根達来5:37→6:27烏日図6:28→白育庫倫6:55→7:21灰勝梁7:22→錫林浩特8:25着

●7月30日(3日目) 別荘1日目 錫林浩特駅に降り立つと、日差しがきつく、みんなサングラスに替えた。錫林浩特は街ができて20年、人口20万人。駅からまっすぐな道路が草原に伸びる。市街は片側3車線の立派な道路がある。周囲は山が右側にどこまでも続く。

バスで草原に出発。途中の西烏珠沁旗で別荘の土地の所有者ハスパートルさんの弟・シヨンリさんがバスに乗り込んできた。直線道路を3時間、その後は道なき道を30分位走り、最後はバスを降りて歩きになった。

歩き出すと私は早速「役目」に取りかかった。まずシヨンリ君と親しくなることだ。挨拶の後、植樹のことを切り出したら、知っているという。早速案内してもらおう約束を取り付けた。シヨンリ君は七人兄弟の六人目だということだ。

別荘は山と白樺林の中の草原にあり、別荘の前にパオ(遊牧民の移動用住居)が3つ並んでいた。今夜からの宿だ。想像したよりいい環境のようだ。母屋で早速昼食となり、手打ちのうどんが出た。コシがありとても美味しい。モンゴルでもよくうどんを食べるそうだ。

食後、善は急げとばかりシヨンリ君に植樹を見に行こうとせがんだ。シヨンリ君、同じパオ仲間のSさん、ハスパートルさん、奥さんのウリナさん、ウリナさんは男の子を抱き、チョル

モンさんにブルグッドさんの息子たちも加わって、結局、大勢で行くことになる。場所は北に動物よけの金網を3箇所張り巡らせた中であつた。山荘から10分前後だ。

植樹の場所は「わりい」が2年前に紹介しているように、克什克騰汗山の麓に広がっていた。モンゴル松が雑草の中に埋もれるように育っている。みんな一つ一つ確認しながら見て回った。30cm、39cm、50cm、30cm、34cm、29cm…。平均30cm位と思われる。1

年で一節分育つということだ。ことしは「50年不見的干旱」(50年に一度の干ばつ)という雨が降らない年で、枯れた所や、葉が黄色くなったのも目立つ。現在、1000本の内、700本が生き残っているということだ。

上方向にだけでなく、横方向にも繁茂したものもある。一通り見た後、以前は川で岩がゴロゴロしている所に、モンゴル松に水を与えるための井戸がある。木を差し込んで水深を測ると120cmあつた。日照りとはいえ、まだまだこの井戸での水遣りが大丈夫なようだ。ちなみに、私たちのなかに雨男、雨女がいたようで、ほとんど毎日、夕方か夜間、雷雨があつた。我々の訪問はモンゴル松達に恵みをもたらしたようだ。

夕方、恒例の羊の解体が始まる。血液を一滴もこぼさず、捨てるものは何もないという芸術的な屠殺方法だ。先ず、心臓を止めるが、羊は既に連れてこられる時に観念しているという。

その間、野外の風呂の準備が始まる。白樺林の奥の川からホース(通常は炊事に母屋に引いている)をセメント製の通称‘五右衛門風呂’に引き水を貯める。そして白樺林で集めてきた朽木を使って3時間くらいかけて湯を沸かす。その後、臨時に囲いをした木製の風呂桶にその湯を移す。夜になると冷えるので昼間に入る。湯に温泉成分のような鉄錆びが浮いているが、これは湯冷めを防ぐとのこと。中国入りしてから初めての風呂は気持ち良かった。

夜、羊尽くしの料理がテーブルに並ぶ。別荘の人たちも一緒



縦横に繁茂しているモンゴル松



モンゴル松に水をやるための井戸



草原で昼風呂を楽しむ



山頂のオボ神を祭る石塚(オボ)

に、ビール、白酒の応酬の内に、歓迎パーティが始まった。我々は大いに話し、大いに食欲を満たした。

●7月31日(4日目) 別荘2日目 この別荘ではハスパトルさん以下の7人兄弟の何人かと漢民族(らしい)家族が普段は牛などを飼育して生活している。何かあるとジョンリ君のように近在から兄弟が駆けつけて来るようだ。合計10回の食事を頂いたが、毎回趣向を凝らした料理で飽きない。基本はシャオピン、豆腐餃、黍・粟の粥、ミルク、奶茶、自家製チーズ、牛乳、砂糖、塩、ヨーグルト、搾菜、油条、ゆで卵、辛ミンなど。

午後、「15分で行ける池」に散歩する。スタッフを合わせて10人位が参加。なだらかな道や草原を、或いは森の中を歩き、30分くらいで池ならぬ山間の川原についた。その後、リーダ役のおじさんが先頭に立ちケモノ道のようなコースをとりどんどん進みます。誰もついていけないペースだ。おじさんは時々勝ち誇ったような謎の笑いを発し、私達の荷物を引き取って進む。ようやく平坦になった草原を花や虫や大きな蟻塚を追いかけてオボ(石塚)に向った。吾亦紅の花が大きくて綺麗だった。地の果てのような景色にやっとオボが見えてきたときは感動した。

オボの周りはガラスの破片やビニール袋が散乱していた。オボ神を祝うために飲んだり食べたりするためという。5時半、別荘に帰り着き、3時間あまりの山登りになった。

休憩がてら山の景色を見ていると、東の山の中腹から羊の群れが移動してきた。この山の中腹に羊飼いが2人住んでおりこの辺の山を移動している。壮大な羊の群れの移動を見るのも日課になった。1500匹位いるそうだ。

帰国後、図書館で海外版人民日報を見ていたら、8月6日付で次の記事があった。[内蒙古輝煌60年・生態緑原]…2006年、造林の面積47.98万ヘクタールを完成して、造林の成育率は85%に達する。森林比率は1999年の14.8%から2006年には17.6%となり、2050万ヘクタールを越える。」この記事には、「内蒙古・克什克騰塞罕坝地区の天然の森林と傾斜地の畑の食用草」の説明付きで、私達が見たものとそっくりな羊の群れの写真が掲載されていた。

●8月1日(5日目) 別荘3日目 午前中は東の山を散歩する。起伏があまりなく、見た目より早く上に登りつくが、そこまで行くと又なだらかな尾根が広がっている。このあたりの山は氷河期の爪あとのガレ(沢状の地形で岩・土砂が崩れた跡)や馬の背(山や岡の屋根、又は屋根状になっている部分)がそのまま残っているようだ。

午後、又前日のオボ山に行った。今度は前回とは逆に、西側の山から逆コースで行った。前日の苦労がウソのように楽だっ

た。オボに着いて休憩していると羊飼いが馬に乗って現れた。例の羊の群れの羊飼いは別人のようだ。私が話しているともう一人現れ、兄弟だった。お菓子をあげようとしたが辞退する。二、三度それを繰り返した後やっと受け取った。これがモンゴル人の習慣のようだ。打ち解けると写真撮影にも気軽に応じてくれ、最後は逆に乗馬姿を写して欲しいという。

●8月2日(6日目) 別荘4日目 朝から風が強い。早帰り組のタクシーが4台、早朝に来て待機していた。早帰り組は更に即時帰国組と北京一日観光組に分かれる。山荘の人たちの手伝いで、順番にモンゴル衣装を着て記念撮影をする。別れの挨拶が終わると、次々にタクシーは出て行った。急に寂しくなった。

風呂の釜炊きを受け継いだ人がいて、最後の風呂を沸かす。午後、私は、釜炊きの弟子を目指した。白樺林に倒れている木をみんなで集めてきて燃やした。最後を私が引き継ぎ、少しは釜炊きの弟子になれたかと思う。早めにたつぷりの湯にゆっくり浸かり、心身ともにすっきりした。

●8月3日(7日目) 別荘最終日 出発の朝、朝日を見に誘われた。一度登った東の山だ。ものの15分で先日の所まで行ったが日の出までに余裕があるので、少し先の尾根まで進んだ。その辺でちょうど朝日が登場。上から植樹のある方向を見ると、そこだけくっきりと四角く夏草に覆われている。

下るとすぐに最後の朝食が始まり、昨夜、準備の荷造りを確かめるころにはタクシーが4台到着した。

西烏殊沁旗は草原のまっすぐな道を1時間位走った所にある。街の入口で石炭工場のようなものが遠くに見えた。運転手に聞くと「煤」という答が返ってきた。最近石炭が見直されてきているとも聞いた。帰国後、人民日報に内モンゴルの煤(石炭)の産出量が中国一になったと書いてあった。地球環境のことが気になるところである。

夕食後、錫林浩特空港を目指す。途中、相当な雷雨となり、飛行機が無事に出るか心配する。

8時頃、空港に着くが雷雨はまだ続いていた。9時頃出発予定の飛行機はまだ北京から来ない。窓から滑走路を見ると、小型のプロペラ機が2台見えるばかり。10時、11時とアナウンスもないまま過ぎてくると、「まさかあの小型機で行くのでは…」という声まで聞こえてきた。待ちに待って、雷雨も遠ざかった深夜2時前にやっと北京からの便が到着。アナウンスがあり、ようやく搭乗する。

●8月4日(最終日) 北京着は午前3時前、急いで荷物を受け取り、高速道路脇の郡王府飯店に着く。シャワーと仮眠を3時間。6時半には弁当を貰いホテルを出発した。

空港のカウンターで並ぶ隣に「日本砂漠化実践協会」の腕章をつけた日本人の団体が並んでいた。包頭の庫布其砂漠で活動してきたとのこと。最近では地球温暖化対策でこのようなボランティア団体が多いのだろうと思う。

◆乗馬、星の観察、地質の話、草原でのバーベキューなど書けばきりが無い。5日間の内モンゴル山荘生活は今後の旅の指針になる。'わりりい'植樹地の現在の様子の報告を兼ねて簡単に5日間の山荘日記を記した。



もの知りノート(2) “王”という字について

岡村景孝

われわれの身近で日常使われている物事や言葉でその根拠や背景を知らない場合が意外と多いようにも思われます。「もの知りノート」と題して細かい項目を少しずつ取り上げてみたいと思います。

「王」という字についていろいろな解釈があり非常に興味深いものがあります。調べた範囲で述べてみましょう。

1. 現在中国における一般的解釈

「二」という字は数字以外に天と地を意味し、「三」という字は天と地とその間に存在する人を意味するということになっています。

「王」という字はこの三者を貫くものであり、帝王を美化した表現だといわれています。孔子は「一貫三為王」といっています。ここでいう三は天と地と人であり、この三つに通じた聖人が王であるべきだと主張しているのです。

その意味に置いて王は世の中で唯一絶対の存在であるべきであり、複数の王が存在することは上記の理念とは矛盾することになります。しかしその後、秦の始皇帝が「皇帝」の名称を使って以来、本来の「王」が意味する存在は「皇帝」と呼ばれるようになり、「王」は単に封建国家における最高の爵位となったのです。

なお、「王」という字は指示文字^(注1)の範疇にはいるということになります。

2. 白川静氏(日本の漢字学者1910～2006)の説

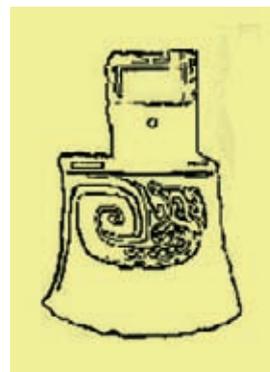
日本の漢字学者白川静氏は独自の説と体系を打ち立てました。

漢字はそもそも神に祈りを捧げるところから生まれたものであってこの点を看過してはいけないということです。たとえば「人」という字は神に祈りを捧げている人の姿の象形文字だと言っています。

「口」という字は人間のくちの象形文字ではなく、神に祈願するものを入れた箱(「さい」と呼んでいます)の象形文字だと主張しています。「王」という字は王の権威を表す置物の象形文字だということです。

白川静氏の主張する王の置物(多くの玉一ぎよく一

の飾り物を施し王の権威の象徴として用いられたもの、まさかりの形から置物に変化したもので下になっている部分が刃にあたる)「字統」白川静著より引用。



王の権威を表す置物。
白川静著「字統」より

3. 中国古文学者の話から

「王」という字は甲骨文字^(注2)以来いくつかの変遷を経てきたといえます。

「王」は最初は「𠩺」という字だったのです。これはきちんと端座している姿を正面からとらえた形です。その後、一国の主として尊敬を込めて王冠を付け加えて「𠩺」という字になったのです。

その後権力との関係を密接に示すものとして「王」という字がつかわれました。これは主人が奴隷を痛めつける柄のない「まさかり」の象形文字なのです。下の部分が刃の部分を表しています。奴隷社会においては暴力をもって統治し自らの地位を安泰にしたのです。したがってこれは王の権威の象徴としての意味をもつのです。この点については白川氏の象形文字だという説とも共通しています。

時代が下がって金文^(注3)では「王」という字が使われています。現在の「王」という字は象形文字が出発点であったことは間違いなさそうです。現在は指事文字だと解釈されているのは「後から意味を美化して付け加えた」と見るのが正しい解釈だと思われます。

(注1) 指示文字とは絵としては描きにくい状況を抽象的な印で表した字。

例：末(すえ)や本(もと)、上(うえ)、下(した)など

(注2) 甲骨文字とは殷(商)の時代の書体で最古の漢字。亀の甲羅や牛や鹿の骨に刻まれたもの。字を刻み付けてこれを熱してその結果によって占いに使われたものです。

(注3) 金文とは青銅器の表面に鑄込まれた、または刻まれた文字のこと。年代的には甲骨文字の後にあたります。

参考文献

1. 白川 静著：「字統」, 平凡社, 2004.
2. 山本 史也著, 白川 静監修：「神様がくれた漢字たち」, 理論社, 2004.
3. 呉 東平：「漢字的故事」, 新世界出版社(中国), 2006.

「紹興・杭州に秋瑾を訪ねて」

松本杏花

先に「秋瑾」について少し紹介しておきましょう。

「清朝の末、中国の女性革命家であり、優れた詩人でもあった秋瑾は、日本に留学して実践女学校に学び、帰国してから故郷の紹興を中心に清朝打倒と女性解放の革命を画策した。しかし事ならずして清朝の官憲に捕らえられ、1907年7月15日、紹興軒亭口の路上を刑場として斬首刑により31歳の命を散らしました。中華民国成立後に孫文は彼女の墓前に詣で、自由と独立を求めて戦い殉じた偉業を讃え、「巾幗英雄」と揮毫しました。

この一生を描いたのが私と同じく「日中文化交流協会」会員でもあり「れぎおん」の同人でもある永田圭介氏です。2004年に『競雄女侠伝（編集工房ノア）』が刊行され、今年2007年に中国語翻訳版（群言出版社）が北京で出版されました。

そして、今年秋瑾就義百周年記念行事の一環として処刑された丁度100年後の7月15日に紹興飯店において、紹興市人民対外友好協

会主催、日中文化交流協会後援により記念会が開催され、私も参加してきましたのです。

大きな台風4号がやって来ている予報に飛行機が欠航するのではないかと心配しながら、私は前日の14日に新幹線で大阪に行き、15日の出発に間に合うよう備えたのです。運良く関西空港は早朝に台風が通過、青空も見えるほどで無事に杭州へ飛び立ち、日本からの19名の参加者は皆一安心でした。杭州では晴天であるがいきなり30度を超える暑さで蒸し蒸しです。すぐに冷房バスに乗り継ぎ一路紹興酒で有名な紹興の街に到着しました。

先に魯迅の故居を見学し3時頃ホテルへ入る予定です。私は昨年夏、主人とここを訪れましたが、今回は夏休みの為か子供達や、学生達が大勢訪れていて、さすが魯迅の生まれた紹興であると納得でした。居内では日本へ留学した時の写真や仙台での藤野先生との交流の様子などの説明もあり、その故居前の臭い豆腐に懐かしさを覚えつつホテルに入りました。入口の赤白の横幕には「就義百周年」としっかり書いてあり、市人民対外友好協会副会長の出迎えを受けました。早速4時から「出版発行儀式」が開催され、私も素早く紹の着物に着替え署名をして会場に入りました。

会場の正面には「競雄女侠伝発行儀式」と書いてあり、

着物姿の秋瑾の写真と大きな盛花が供えられています。友好協会会長や秋瑾研究会会長等の役職者の挨拶が長々と続き、予定の時間が大幅に過ぎてしまいましたが、6時過ぎから会場を別にして晩餐会が開かれ、和やかなうちに日中友好を深めました。

翌日は秋瑾が処刑された市内の軒亭口へ行きましたが、その場所には「秋瑾烈士記念碑」が道の真ん中に立ち、車が右に左に行き交い、その奥に白大理石の見上げるほどの秋瑾像が立っています。台座の上の全身像は2m以上あるとのことで、内に秘めた闘志とは裏腹に誠に優しい眼差しで少し左の遠方を見つめ、凛とした姿です。永田氏がこの像の前で伝記を書こうと決心した気持ちが理解できました。他に秋瑾が捕らえられるまで教えていた教室や、家族との住居を見学し、杭州へ戻りました。

西湖では蓮の花が真盛りで枝垂柳の風が涼しさを誘い、辺に同じく立つ白大理石の像や、その傍らに静かに眠る秋瑾墓を拝して、この「巾幗英雄」を偲びました。

この度は全てVIP待遇であった為にホテルは「汪荘」食事は「楼外楼」遊覧船も特別仕立ての船であり、その上記念すべき百周年に参加できた喜びに満足して帰国しました。

特に私事ですが嬉しいニュースがありました。拙俳句集に感想文を寄せてくださいました章方松先生が温州市より車を4時間も運転して会いに来てくださったのです。唐時代の漢詩を勉強している人と一緒でした。6首の拙句を和紙に認め、表装をしてプレゼントして下さいました。正に宝物になりました。

松本杏花さんの俳句集

yú qíng cán xīn

「余情残心」より

*6月号より新しい句集「余情残心」からの抜粋になりました。

早稲の花在所の風のやはらかし

qīng xīn zhào shuǐ tián

清馨罩水田

zǎo dào huā kāi suì suì xiān

早稻花开穗穗鲜

xiāng fēng ruǎn miǎn miǎn

乡风软绵绵

季语：早稻花、夏

赏析：这是首歌颂恬静的乡村风情诗作。

早稻花开、乡风软绵。陈陈清香、沁人心脾。虽然这软风是靠人的触觉感知、但从视觉和嗅觉上、都给人以美的享受。

美の感覚と山岳美

私は四姑娘山で現地の村人を連れて山奥を歩き廻るようになって、美の感覚が世界共通ではない事を実感しました。

私が美しいと思う花や風景と現地に住む人々や後年観光開発されて2000年以後に急増した初期の中国国内観光客のそれとがかなり乖離していたのです。

美の感覚は文化であり、文化が異なれば美の感覚が異なるのでした。

中国には素晴らしい伝統的な山岳美があります。その代表が黄山です。昔、私は黄山の山岳美に関心を持ち黄山を繰り返し訪れて撮影した事があります(写真1)。

四姑娘山にも黄山型の山岳美があり、現地のチベット族や初期の中国国内観光客はもっぱらそれを賞賛していました。

しかし四姑娘山の主要な山岳美はアルプス型で、写真集「蜀山女神」で紹介している山岳美の殆どもアルプス型です(写真2)。

伝統的な中国文化だけによっては、アルプス型の山岳美を理解できないようでした。

四姑娘山に住む殆どの村人も同様でしたが、現在では彼らは私を含む外国の観光客の言動を観察して美の感覚を変えつつあります。

又ここ数年自然に親しもうとする若い中国国内観光客が増えつつあり、彼らもアルプス型の山岳美を理解し関心を持っています。

今後、中国における更なる経済の発展と外国文化の理解が進行するに連れて、アルプス型の山岳美に関心を持つ中国国内観光客が増えるでしょう。

そしてこのような文化の理解によって、言葉の障壁を越えた中国と外国との真の相互理解と国際協調の意識が更に深まって行くことでしょう。

注)「黄山型」や「アルプス型」の言葉は説明のために便宜的に付けた名称で、広く認知されている名称ではありません。



写真1 中国の伝統的な山岳美の黄山(安徽省)



写真2 四姑娘山の主要な山岳美はアルプス型(四川省)

あっという間に駆け抜けた、中国・チベット12日間の旅だった。

行く前は、青いケシをはじめ花が咲き乱れている、標高が4300mの地点に行くということくらいしか、知らなかった。さすがに出発を数日後に控え、「一体私はどこに行くのだろうか?」と気になったが、ワンリィのホームページに紹介が出ていて大いに期待が膨らむものの、四川省の成都からどの程度はなれたところに行くのか、全くわからない。第一、目的地は四川省なのだから中国(漢民族)だとばかり思っていたのだが、行ってみてびっくり、我々が過ごしたのはほとんどチベット民族の地域だったのだ。チベット民族はチベット自治区に住んでいるものとばかり思っていた自分の認識不足を痛感した。

さて、まったくの無知で始まった旅ながら、すばらしい案内人・大川氏のおかげで多少なりともチベットの歴史、文化に触れることができたのは幸いだった。山の上にそびえる領主の館。この領主は中国革命のとき、八路軍に取り入って命脈を保ったらしい。また、由緒あるチベット仏教のお寺。ここにはすばらしい壁画が保存されているが、文化大革命の際にはお坊さんたちが壁画の前に経典を積み上げて何とか隠し通し、破壊から救ったとか。いずれも悠久の時間の中でゆっくりと朽ちていってはいるが、かつては喜び、恐れ、祈りなど、人間の営みが渦巻いていた場所なのだろう。そして伝統的な石造りながらも今も使われている農村の家々。屋上から女の子が「おかあさーん」と呼びかけている。



石積みチベット建築

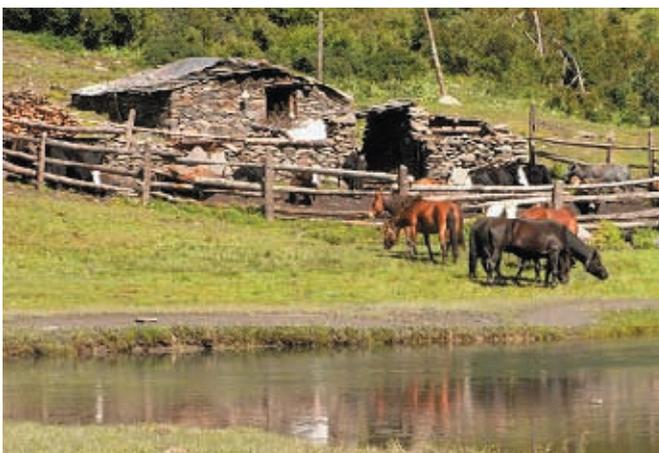
その声は明るい畑の上をどこまでも通っていき、遠くの方から返事が戻ってくる。きっとこんな光景も、ずっと昔から繰り返されてきたのだろう、なんともどかな農村の一コマだった。

もちろん、今回の旅のビッグイベントはなんと言っても四姑娘山自然保護区でのキャンプである。馬の背に何時間も揺られてキャンプ場にたどり着き、そしてそこからまた咲き乱れる花々を見ながら登っていき、しょぼ降る雨の中でそっと咲いている青いケシを見つけた喜びは、たどえようもない。まさに、天上に咲く花、という感じであった。今年は天候不順で例年よりも花が少ないそうだが、我々の目には、どの斜面もエーデルワイスやキンポウゲで一面の花のじゅうたんのように思えた。ただし、ダイオウとかバイモなど薬草になる植物は業者に根こそぎ採られてしまっているらしく、以前はいっぱいあったという谷に行っても全く見つけることができなかった。これらの植物の買い付けに日本も関わっているらしいと聞くと複雑な気持ちである。

キャンプサイトはヤクの放牧小屋の隣に作られた。石を積み上げて作った小さな小屋の中はいろいろで暖かく、皆ほっとしたように火にあたっている。小屋の主人がいろりにかけた大なべで手際よく料理を作り、おいしそうな匂いが漂ってくる頃には小屋は満員。家の人も、関係ない人も料理の分け前にあずかっているらしい。電気洗濯機を回して作ったバターやヨーグルトも供された。そして誰もが大声で、楽しそうにおしゃべりをしている。なにもない、けれどあたたかい、そんなチベットのくらしを垣間見た今回の旅だった。



幻の高山植物・青いケシ



キャンプ地の隣接地は馬の放牧場だ

頭の中が真っ白になっていた。

海外でのひとり旅で一番重要なもの。それは命。その次はお金だと思う。パスポートなど無くしたところでその国の警察や大使館に駆け込めばどうにかなるし、それ以外の物なんてお金さえあるのなら買えばすむ。でもお金が無かったら行動できない。泊まる事も食べる事も移動する事もできなくなってしまうのだ。

明日の朝には憧れの亜丁に出発だという所まできているのに、此处まで来てお金が無い事に気づくなんて～!!!!

正確に言えばお金はあった。ただし日本円でなら。亜丁へと逸る気持ちで先へ先へと突き進んでしまった私は、成都で日本円を十分な中国元に両替しておくのをすっかり忘れていたのだ。

何度も繰り返すが稲城は四川省の山奥のまた奥の小さな街だ。外貨を両替できる場所なんてあるはずが無い。理塘まで戻ったところで同じ事だ。康定まで戻ればどうだろう……康定だって怪しいものだ。

財布の中に残されているのは500元程度だけだった。亜丁で数日過ごし稲城に戻った後、理塘で数日滞在。その後他の場所に立ち寄りながら成都に戻るのには3週間後の旅の最後のつもりだったが、500元ではそれまでの宿泊費、食費、交通費など考えても足りるはずが無かった。稲城から成都までの交通費だけでも200元以上かかるのだ。しかも聞いたところによると亜丁は中国の自然保護区に指定されているため住民以外の者が立ち入る場合は入場料として150元徴収されるとの事だった。それを考えればこのまま亜丁に行った後、まっすぐ成都に戻るにしたって手持ちの中国元では十分でない。

どうしよう、どうしよう、どうしよう……

いくら考えたところで旅をつづける方法は一つしかなかった。再び2日ばかりで成都に戻り、日本円を両替して出直してくる事だけだ。しかしこれから成都に戻って出直していたら貴重な旅の時間が更に一週間無駄になってしまう。うわ～ん!! 此处まで来て～!!! 私のバカ、バカ、バカヤロウ～!!!!

その時私の脳裏には今から10年以上前に訪れたマレーシアのクアラルンプールで知り合った日本人のおじさんの姿が浮かんでいた。それは私がタイのバンコクに2年ほど滞在していた頃の話で、タイのビザを延長するための手続きを兼ねマレーシアを旅行していた時の事である。季節は丁度クリスマスシーズンで街はイルミネーションで彩られていた。熱帯のイスラム教国であるマレー

シアでは殆ど実感がわかなかったのだが……。

その時もやはり私はバックパッカー向け安宿のドミトリーに泊まっていた。そこで知り合った数人の日本人旅行者の中に面白いおじさんが混じっていたのだ。職業はなんと歌舞伎のバックで鼓を打つのがお仕事というお方だった。

シンガポールに滞在した後、クリスマスイブはクアラルンプールで過ごすそうと電車で10時間かけてやってきて、宿の宿泊手続きをしようとしたところでシンガポールの宿のセーフティボックスにパスポートを忘れてきた事に気づき、慌ててまた電車でシンガポールまで取りに戻ったのだそうだ。

おかげでクリスマスイブの夜は電車の中で過ごす羽目になったという話を聞いた私たちはお腹を抱えて笑ったのだったが、ここで両替の為に2日ばかりで成都まで戻るような事になれば、あの時のおじさんよりもっと間抜けなエピソードを残してしまう事になるじゃないか～!

思わず涙ぐみそうになったその時だった。突然私の頭に神の天啓が閃いたのだ。

再び思わず息を呑み、あわてて財布の中に溜っていたあちこちの名刺やレシートなどを取り出してベッドの上にはら撒くとその中から一枚の名刺を見つけ出した。

「あった～!!!!」

それはこの一人旅の序章である四姑娘山の旅の最後に、康定の路上で偶然に、本当に偶然に出会った烏里烏沙氏が「何かあったら電話していいよ」と携帯電話の番号を走り書きして渡してくれた物だった。

以前「わんりい」紙上でも中国の少数民族について原稿を書かれていた烏里氏は四川省の出身だ。現在は日本在住だがこの時は丁度日本人旅行者をチベットへ案内する仕事のために中国に帰っていたのだそうで、稲城の隣街である理塘には彼の親戚も住んでいるし、NPOの活動で行っている東チベット高原に小学校を立てる活動やその基金を集める為、旅行者の案内人としてしょっちゅうこの辺りの土地を訪れている彼にとっては稲城など地元のようなものだろう。烏里氏だったら何か良い方法を知っているかもしれない。

名刺を握りしめて部屋を飛び出すと、泊まっていた青年旅舎の事務室を訪れた。

「お願い! 緊急の用事があるので電話させて下さ～い!!!!」

従業員の部屋も兼ねている事務室には奥の方には二段ベッドがならんでおり、例のやる気のなさそうな旅舎の女性は丁度寝ようとしているところだった。

「何よ～。私の仕事時間はもう終わっているのよお」

「お願い！ お金を払うから電話を使わせて！」

「早く済ませてよ。私はもう寝るんだからね」

そういいながら彼女はベッドの中に入ってしまった。私はかまわず卓上にあった電話の受話器を取り上げ烏里氏の番号にかけてみる。が、聞こえてくるのは録音されたメッセージの女性の声だけだ。中国語なので何と言っているのか解からない。何度かけなおしても同じだった。

「ねえ！ 電話が繋がらないの！ 何て言ってるのか聞いてくれませんか!?!」

宿の女性に声をかけるが、

「私はもう休んでるのよ。疲れてて眠いんだから静かにしてよ」

と布団にくるまったまま起きてくる様子もない。くそ～！ 何なんだ、この宿は！ 外国人の宿泊客が困っているというのに！

「ねえ！ お願い！ 緊急の用事なの！」

もう返事もかえってこなかった。

その時である。切迫した様子の私を見かねたのか、それまで同じ部屋のなかでパソコンに向かっていた女性が立ち上がると「どうしたの？」とそばにきてくれた。どのような事情で彼女がこの部屋のパソコンを使っていたのかはわからないが、宿の従業員ではないようだった。

「緊急でかけたい電話が繋がらないの」

彼女が私に代わって電話のメッセージを聞くと「相手が携帯電話だから普通の電話からじゃ繋がらないのよ」と自分の携帯電話をとり出し烏里氏の番号を押した。今度は直ぐに電話が繋がりに彼女が話し始める。

「あなた烏里さん？ ここにあなたと話したいという日本の女性がいます。今すぐ私のいう番号にかけなおしてくれる？」

彼女が電話を切ると直ぐに事務所の電話が鳴った。

「烏里さ～ん!!!!!!」

海外でピンチの状況に知人と日本語で話せるって事はなんてホッとすることだろう。電話が繋がっただけで、私は今の状況が全て解決したかのように嬉しい気持ちになりかけてしまったのだが、本質的な問題は未だ大きく横たわったままなのだった。

「それは困りましたねえ……」状況を説明すると烏里氏も受話器のむこうで声を曇らせた。やはり稲城や理糖では銀行で外貨に両替する事などまず無理だし、康定でもむずかしいとの事だった。稲城には烏里さんの友人もいないし、この辺の土地の人間は日本円になじみも無いので両替を頼む事もできないようだ。

「ちょっと待ってて下さい。私も何か方法があるか当たってみるから。とりあえず一旦電話を切って、またそ

ちらにかけ直します」

受話器を置くととりあえず部屋に戻って連絡を待つことにした。とにかく烏里氏に連絡がついたことで気持ちは落ち着き、最悪の場合は成都まで戻って出直す覚悟も決めた。

さっきまで一緒だったタクシードライバーのお兄ちゃんの顔が浮かんでくる。明日の朝私が行かないといったら、彼はがっかりするかなあ……。

先ほどのパソコンの女性が部屋まで呼びにきてくれた。

「さっきの友達から電話が入っているわよ」

ドキドキしながら電話に出ると、烏里氏の明るい声が聞こえてきた。

「良かった！ 元子さん、大丈夫だよ！ 今日偶然、私の友人が稲城にいるので、彼が両替してくれますよ！ 今の正確なレートはわからないけど、だいたい1万円で650元くらいの筈ですから、彼にその金額で両替してもらって下さい。後で私が彼に会ってまた650円で両替しますからね。今のお金とあわせれば何とか足りるでしょう」

「ええー烏里 烏里さん!!! ありがとうううう～!!! バンザーイ!!!!」

「私の友達は、今バスターミナルに居ます。今すぐバスターミナルまで行ってください。じゃあ気をつけてね」

外はいつしか雨が降り出していたがそんな事は全然気にならなかった。防寒のため丸々と着膨れした上に、登山用の上下ショッキングピンクの合羽を着込んだ異様なでたちで、私は夜の稲城の街をバスターミナルまで走って行った。烏里氏のお友達はさぞかしギョツとされたに違いないが、にこやかに私の1万円札と中国の650元を取り替えてくれた。

やった！ やった！ やった～!!! これで明日、垂丁に行ける～!!!

それにしても何でラッキーなんだろう！

烏里氏が今、中国に居る事も、康定で烏里氏に会って携帯の番号を教えてもらっていた事も、烏里氏の友人がたまたま稲城に居た事も、ぜ～んぶ偶然なのだ。

普通なら完全にアウトだったところを数々の幸運に恵まれて、このピンチを切り抜けることができたのだ。やはりこれはもう神様に守られているとしか思えない!!! きつとこの土地の神様が私が来た事を歓迎してくれてるんだ！ 絶対そうだ～!!! 神様有難う～!!!

もしあの時、目の前にチベット寺院があったなら私は迷わず五体投地していたに違いない。

(続く)

フエノスアイレス、南米のパリに行く

(アルゼンチン 1)

嘉陽ひろこ

韓国ソウル在住で人形作家の友人Kが夫の赴任でアルゼンチンに行ってしまった。滞在予定の半分は過ぎたようだ。私は数年前のペルー旅行の往復で、長時間のフライトは二度と耐えられない、南米はこれが最後！と、堅く決心したのだが、それは脆くも崩れ、旅行仲間のSと共に、エアカナダの乗客となってしまったのは2006年の暮れであった。

トロント乗り換えのサンチャゴ経由、アルゼンチンの空の玄関エセイサ国際空港に到着したのは、成田を出発してから30時間(待ち時間含む)を経過していた。係員の押す車椅子に揺られ、真夏のアルゼンチンの第一歩、ハイ気分の私に、現実は厳しかった。ターンテーブルが幾度も回ったがリュックが出てこない……。親切な係員は言葉がさっぱりわからない異邦人に手早く書類を作りKの待つロビーへ押し出した。

10年ほど前に香港映画『フエノスアイレス』を観たことがある。若い二人の男性(レスリー・チャンとトニー・レオン)は、ゲイ故に祖国を離れ、地の果て(アジアからは真に地球の裏側だ)で生活するが、レスリーは男遍歴を重ね、他人の金に手を出し落ちていく。トニーはナイトクラブのガードマンをしながら新しい愛を見つけて祖国へ戻る。と、言った退廃とせつなさに満ちた映画だった。NHK BS放送で観た“放浪の果てに幸せはあるか—フエノスアイレス—”は、若き宗教学者豊島某の自身の放浪癖と家族への懺悔をフエノスアイレスの街に重ねて語り、なるほど“心の旅”であった。

ピアソラのタンゴのメロディ、サッカーのマラドーナ、北に世界一の瀑布イグアス、南はパタゴニアの氷河といったお決まりのイメージしかない私にK夫婦は、様々な“アルゼンチン”を用意してくれた。

Kの貸してくれたTシャツにパジャマ兼用のトレーナーで、夜の街に繰り出す。フエノスアイレスは外食産業が盛んだ。お勧めのレストランは彼らの住むマンションから歩いて10分ほど。パンパと呼ばれる広大な草原で肉牛は放っておいても繁殖するという。炭火で焼いた牛肉アサードが、ここアルゼンチンの郷土料理なのだ。

ワインで頬を紅くしたSとKの夫、Kと私はデザートの上盛りアイスクリームも平らげ、夜風に吹かれながらフエノスアイレスの初めての夜は更けていった。

Kの夫は在アルゼンチン韓国大使館の職員である。私たちの来訪に合わせてクリスマス休暇を取り、観光ドライバ

ーを引き受けてくれた。18階の彼らのマンションの部屋からは東側にフエノスアイレスのセントロに向かう6車線の道路が見え、その向こうに競馬場、鉄道、国内線の空港、更に銀色に輝く真水の海・プラタが、盛り上がりが見える。南側には緑豊かな手入れの行き届いたポロの球技場がある。

黄昏の夕焼けの美しさ、日没後はネオン輝く素晴らしい夜景、高級ホテルはかくもあるのだろうか。クリスマスや新年を祝う花火は、夜を徹して空を焦がし、個人の家からも打ち上げると聞いた。2002年に経済大破綻をした国とはとても思えない心のゆとりを感じさせる。ここアルゼンチンもまたスペインと同様にシエスタ(昼寝)の習慣があり、観光地や博物館も2～3時間の昼休みを取るという。24時間、365日開庁とどこかの区長の言うサービスは人間性を無視した無謀な行為と言わざるを得ない。月曜日休館する国立美術館は入館料を取らない。博物館によっては日曜日は無料というところもある。

ボカ地区に行った。かつてアルゼンチン随一の港だったボカは船乗りや工場労働者であふれていた。そんな男たちを相手にするバーの片隅から、アルゼンチンタンゴの官能的なステップが生まれたという。今はカラフルに彩られた家や商店が立ち並ぶカミニート(小径)の町として観光客を迎えている。

道路に並んだ、レストランのテーブルに客を呼ぶカップルがバンドネオンの生演奏に足をからませて踊っている。まばゆい夏の日射しに照らされてセピア色の映像の中の風景のようだ。

ヨーロッパからの移民が築いた街フエノスアイレス、南米の他の国との大きな違いは移民による白人社会ということ、先史遺跡もみあたらない。南米にありながらヨーロッパらしくありたいと町並を造ってきたアルゼンチンの人々。明日はどんなアルゼンチンを見せてくれるのだろうか……。



アルゼンチン名物アサード(牛肉の炭火焼き)、熱いうちにどうぞ!

コロンボでもホタルが見られる

今回はホタルの話をしようと思います。海外旅行ガイドやテレビの海外紀行番組で紹介されるような、「樹木一面にホタルが集まってあたかもクリスマスツリーに見える」と云うような派手な話ではありません。私の住んでいたコロンボの住宅地周辺にひっそりと生息している、小さなホタルの話です。

私が住んでいたのはコロンボ7と呼ばれる地域で、シナモンガーデンと呼ばれる事もあります。植民地時代にはこのあたりでシナモンが栽培されていた名残ですが、現在は官庁や文化施設と住宅が混在する地域になっています。スリランカに行った方にはオデールやパラダイスロード等の在留外国人と観光客向けの商業施設、タウンホールや国立博物館等がある地域と言えます。

コロニアルスタイルの立派なお屋敷が突然に壊され、跡地に高級アパートの案内看板が出現するなど開発が進んでいます。まだまだ各家には花壇や大きな樹があり自然環境は十分に残されています。我が家の庭にある大木にはリスが住み、夕暮れ時には公園で過ごしていたコウモリがこの木の洞に帰って来るといった具合です。

スリランカに赴任したばかりのある雨上がりの夕方です。夕食を待ちながら、ビール片手に庭を眺めていた時に、雨にぬれた葉っぱのあたりに点滅している光を見つけました。どうやらホタルの様です。目を凝らすと、葉っぱのあたりだけでなく芝生の上やそこかしこで夕闇の中に光がぼつりぼつりと浮き上がって見えるではありませんか。スリランカでホタルが見られるなんて、考えた事もなかったので嬉しくなっちゃいました。

雨上がりの空には、日本の大都市では見る事の出来ない数の星が瞬いています。圧倒される様な星の数と慎ましやかなホタルの光のコントラスト。赴任したばかり時期でもありましたので、また新しい国に来たんだと改めて実感しました。

出来すぎの話と思われるかもしれませんが、何カ国かに駐在した経験で新しい国に来たと実感するのは、業務上では事務所で現地スタッフと始めて言葉を交わす時、日常生活では新しい家から何気なく見える光景である事が多いです。

マレーシアではアパートのベランダから見た夜空を縦横に走り、光で雲を浮かび上がらせるほどの大きな稲光で

した。シンガポールでは、真夜中でも煌煌と照明が輝き多くの人が働いているコンテナターミナルを見た時に、日本から新しい任地に移ったんだと感じました。

話が逸れてしまいましたが、ホタルを見たのはこれが初めてだったわけではありません。以前の赴任地であったマレーシアでは冒頭に書いたクリスマスツリーのような樹を観たことがありました。でも、旅行者とは違って現地に駐在する日本人の心情には、このような艶やかなホタルよりはスリランカで観たホタルのようにひっそりとしたホタルのほうが合う様です。

僕は横浜生まれの横浜育ち、しかも海に近い地域だったので、ホタルは自宅の庭で見る物では無く、どこか遠くまでホタル狩り(都心のホテルでもやっていますけど直ぐに死んじゃうみたいでホタルが可哀相です)に行ってみるものだと思込んでいました。

スリランカに長く住んでいる方に聞いたところでは、数は減ってきているもののコロンボでは、殆ど一年中見る事が出来るそうです。日本ならば温室の中で育てられている植物が屋外で自然に育っている国で見るホタルって云うのも風情がありますよ。(つい最近聞いた話では、町田には今でも自生のホタルを見る事の出来る地域があるそうです)

旅行でスリランカに行かれた方が一般家庭に入り込んでホタルを見るのは難しいと思いますので、コロンボで簡単にホタルを見る事の出来る、とっておきの場所を教えましょう。

コロンボ7にあるアートギャラリー近くのサマーガーデンという屋外レストランで見る事が出来ます。レストランとは云っても堅苦しい店ではないので、ビールとおつまみをオーダーすれば十分。ツアーに参加してスリランカに行かれる方は、夕食を毎回お仕着せのレストランで取られることが多いと思います。自由時間を利用してちょっとだけ冒険してみませんか。

コロンボは小さな町なので、どこのホテルからでもタクシーを使えば大した時間をかけずに行ける場所だし、旅行者にとっても治安がかなり良い町なので最低限の注意事項を忘れなければ、スリランカの雰囲気を楽しめる店です。この店に関しては別の機会に詳しく書きますが、地元の人が行くビアガーデンだと考えて下さい。飲み屋としても面白い場所なのでホタルに興味がない方にもスリランカ研究の一環として行く事をお勧めします。

人々のアフリカのイメージは、どうしても野生動物、砂漠、マサイ、貧困、戦争であることを私は批判するべきではないと思う。私も実際に行く前は確かに、野生動物はすぐそこにおいてアフリカ人なら誰でも身近に感じていると思っていたし、赤い衣装のマサイ族がダンスを見せてくれるのは、ありふれた光景であると信じていた。それらもアフリカのイメージの一つで間違いないと思う。実際テレビで見るアフリカの映像はそういったイメージを持つように作られているように思う。

しかし、アフリカを取り巻く状況は日々変化しており、いつまでも野生動物がサバンナを駆け巡り、というだけではなく、環境問題も、「自然溢れる大地」、「手付かずの自然」などと称されるアフリカの大地にあっても例外なく進行していることは明らかであり、問題はその認識が先進国に比べ甘いこと、遅れていることだ。

アフリカの人口の70%が農業人口とも言われる巨大農業大陸にあって、灌漑農業が行われているのはたった4%で、その残りは雨任せの天水農業である。環境と農業の関係は密接で、環境が守られないことには人々が生きていけないということは明らかなことだ。

驚くことではあるが、アフリカ諸国で農作物の自給自足をしているのは、たった3カ国しかない。ほとんどの国で農作物は輸入されているという事実。

アフリカの大自然も、都市の発展と共に、環境問題として深刻な被害を被り始めている。私のいたケニアをとっても、首都ナイロビの発展と共にその近代生活を支えるために、先進国と同じような問題が起こっている。そして深刻なのは、それに対する対策が立ち遅

れており、ほぼ野放しとなっているということだ。

中でも、森林破壊の問題は深刻である。ケニアでは料理用の燃料として薪を使うが、農村では主に落ちていた木々を拾ってきている。都市部では、木炭を使うことが多い。この木炭を作るのに森林の伐採が行われる。

日本でも有名なマータイ博士は、「グリーンベルト」と称して、植林活動を昔からしているが、「使った分を植える」という発想も、なかなか余裕がなければ生まれない。彼女は、その苗を寄付しているからこそ支持されているのだと思う。ケニアには国立公園となっている森林が多くあるが、その規模も徐々に縮小しているという。ほかに、サファリなどで観光客に開かれている国立公園に近隣の生活排水が流れこんでいて生態系に影響しているといったことも聞かれる。

また大気汚染も重要な問題だ。ケニアでは、日本の中古車が数多く走っているが、ディーゼル車が多く、黒い煙を吐き散らかして走っていることも見かける。日本ではエコブームで、環境に優しい商品や生活を心がけようといったことがあるが、地球の違うところでは、日本製の車や機械が環境に配慮することなく使われているといったこともある。

昔から変わらない生活をする私のもう一つの実家となったケニアの小さな農村「キアカンジャ」の風景を紹介します。ケニアのナイロビから車で2時間、ニエリという都市からさらに車で30分ほど北上したところにあり、今でも伝統的な暮らしをしてい

る農耕民族キクユ族の生活風景です。この自然がいつまでも続くことを祈りながら。



ケニアの青空



バナナの木



アバディア国立公園を望む



ナイロビへと続く道

久しぶりのジャワカレー、ちょっと甘く後でピリッ一味。懐かしい味でした。ロサリタさん、テレマカシバニヤ（Nona ROSALITA, terima kasih banyak.）

ついでにインドネシアのお話を少し記してみました。

I. 「ブンガワンソロ」の思い出

戦争中私どもがジャワ駐屯中に聴いた「ブンガワンソロ」の歌の作者・グサン氏のこと。当時藤山一郎氏は軍宣伝班の一員として現地に来られましたがその後、この歌を内地に持ち帰り日本語の歌詞をつけて歌いました。「ブンガワン・ソロ」は戦後の一時期、一般の流行歌と共に氏や松田トシさんによって歌われたのですが、グサン氏はこの歌の作詞・作曲をしたその人です。

グサン氏が中部ジャワ、ソロ市郊外のスンニに住んでいたのを知った旧軍人の故平野氏がグサン氏を支援する為の基金グループを作りました。当時インドネシアにいた私どもに呼びかけ、平成に入ってから度々同市を訪問して、グサン氏の親族他関係者と一緒に交流を続けておりました。

ソロ市内のホテルでの交流会の最後には、先ずグサン氏による「ブンガワン・ソロ」、その後全員で古くかあるクロンチョンの伴奏に合わせて全員の大合唱で終わる懐かしい会でした。インドネシア人では珍しく氏は今年10月で90歳になりますが、弟妹と一緒に生活も最近は健康に恵まれずいろいろな病気の治療に専念されている由です。が、氏を訪れた新聞記者に「気力はまだ十分残っており音楽活動を続けたい」と語ったことが記事になります。
(コンパス・コム紙07/4/16)

II. 「インドネシア語」について

インドネシア語は日本人にとって大変やさしい外国語で、カタカナで書いたものをそのまま読んでもある程度通じるのがよいところです。正確な発音は少し難しくなり、特に公用語の新聞記事を理解するにはきちんと学習する必要があります。通常な会話は単語を記憶しておくだけで殆ど通じるので、一般の庶民達とは気軽に誰とでも話が出来ます。

私はジャワに行くときは国営航空“ガルーダ”を利用し、できれば最後尾の2人掛けの椅子に移り、スチュワーデスが後ろにありますので、忙しい彼女達の手が空いた時に話しかけて、何とか記憶（インドネシア語）を取り戻すようにしております。

インドネシア語は、故スカルノ氏他の独立運動（オランダより）の為、各地域ごとの現地語（約250語位ある）の上に統一語が必要としてインドネシア語が決められてまし

インドネシアのこと

小山芳雄

まちはミュージアム（麻生区）メンバー

た。日本軍によってオランダから解放された後、日本がインドネシアを統治するために軍政を施行し、その中で特に教育を重視し小学校以上の各学校にインドネシア語と日本語を平行して教えました。戦後独立した後

の教育の普及で私どもの行くようなところではどこでも不自由なく使えるようになりました。（ちなみにジャワ島西部はスダ後、中、東部はジャワ語）

インドネシア語の特徴として日本語同様、人称代名詞が多くあることが上げられます。これは東南アジアや西南太平洋地区に限った現象で、英語では一人称・Iと二人称YOUしかないことと対比されます。

例えば二人称代名詞で、日本語で、君、貴方、あんた、おまえ、貴様、汝、てめえ、奥さん、娘は、インドネシア語では、トアン、ウンウ、カム、ニヨニヤ、ノナ、アナック、パパイブ、バング、ミカ。一人称代名詞でも、日本語には私、僕、自分、小生、俺、わし、うちなどなどがありますがインドネシア語でもサヤ、アクウ、ハンバ、デリなどなどがあります。

少しでもインドネシアを知っている日本人は皆一様にインドネシアに親近感を持っておりませんが、これは日本人側だけではなくインドネシア人側も日本人に親近感をもっているように思われます。空港に下り立ち外に出たときのホッとすること、人々の屈託のない笑顔……。インドネシアのあちこちで暮す日本人たちは寛いで心地よく生活しており、帰国してもそれぞれでグループを作り同国のことを懐かしんでいるのです。

(参考：月刊インドネシア 07/2月号)

【活動報告】 周路新作木版画展

2007年8月16日～21日 於：世界観ギャラリー

‘わんりい’に長年にわたって掲載の「黄土高原来信1・II」で‘わんりい’メンバーには馴染み深い中国人版画家・周路氏による新作絶版木版画展が世界観ギャラリーと‘わんりい’の協力により「世界観ギャラリー」(神田小川町)で、開催されました。

桁外れの猛暑の最中でしたが、周路先生とともに黄土高原を訪れた‘わんりい’メンバー、活動上、周路氏と関わり深い日中藝術研究会の皆様、版画制作に携わる方々など多数の方が見えました。旧交を温めたり絶版木版画の技法を紹介したりのいい展覧会でした。周路氏も皆様の協力と展覧会の成功を喜んでおりました。



中国を読む (44)

「ドキュメンタリーの力」 鎌仲ひとみ、金聖雄、海南友子・著 寺子屋新書
 「女たちがつくるアジア」 松井やより 岩波新書



この夏、アジアに関係する本を2冊読んだ。タイトルは「ドキュメンタリーの力」「女たちがつくるアジア」。

「ドキュメンタリーの力」のひとつの章では映画監督の海南友子さんが切り取った中国がレポートされている。海南さんは、日本軍が中国に残っていた毒ガス、兵器が未だに中国の人々へ被害を与えていることに衝撃を受け、一人カメラを担いで、中国の被害者を記録している。被害者の一人は一日中続く咳きに悩まされ、その妻さえもノイローゼとなり退職を余儀なくされた。父親が毒ガスで亡くなった家族は、治療費が膨大な借金となって残り、生活に押し掛かっている。日本軍が残っていた兵器を子どもが拾い、爆音とともに死ぬ事故も起きた。死んだ子どもを抱き起こした瞬間、わが子の内臓が足元に落ちた経験を持つ親…。そして、何よりそれらの事実は、あまり日本では知られていない。マスコミが放送したがらないからだ。

知らない日本は「女たちがつくるアジア」でも現れる。日本に行けば豊かな生活が送れると信じ、海を渡った女性たち。中には売春を強要され、苦しみのあまりボスを殺してしまう人やHIVに感染し苦しむ人もいる。フィリピンでは、海老の養殖場を確保するため、現地の人々が住む場所を奪われている。海老の養殖は日本へ輸出するため。日本の街中でティッシュが配布されている一方、森林伐採のためマレーシアの先住民族の生活が危機にさらされている。海老好きで、テレクラのティッシュを有効活用する私の知らない事実である。

2冊の本が教えてくれるのは、過去の過ちは現代まで繋がっていて、現代のティッシュ一枚もアジアの誰かと繋がっていること。そして、私たちはその意識が希薄なまま生活している。

(真中智子)

《'わんりい' 掲示板》

どくらく しゅうらく
 「独楽・衆楽」 —中国パブリックアートの今

中国美術学院の教員と学生による絵画、彫刻、映像などさまざまなジャンルの作品約90点。現在の中国の「パブリック」の概念と動向を紹介し、現代美術の未来を展望する。(参加：無料)

於：日中友好会館美術館

<http://www.jcfc.or.jp/institution/museum.html>

(文京区後楽1-5-3 日中友好会館1F&地下1F)

行き方：JR総武線・飯田橋駅東口下車・徒歩7分

大江戸線・飯田橋駅C3出口より徒歩1分

2007年9月22日(土)～10月21日(日)(火曜日は休館)

10:00～17:00

主催：(財)日中友好会館
中国美術学院

後援：中国中日大使館
中国美術家協会・他多数

●ギャラリートーク

9月22日(土)15:30～

講師：楊奇瑞
(中国美術学院視覚芸術学院院长)

～作品解説と中国パブリックアート事情について～

問合せ：☎03-3815-5085(日中友好会館美術部)



まるごと1日パレスチナ

第10回町田発国際ボランティア祭2007 夢広場プレイベント

2007年10月8日(月・祝)

於：町田市民ホール第4会議室

14:00開演 19:30終了(開演14:00途中休憩あり)

参加費：一般2000円(前売1500円)

学生1800円(前売1300円) 要事前予約

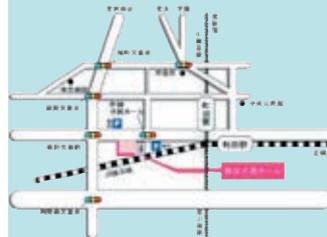
主催：STEP by STEP

共催：(財)町田市文化・国際交流財団/まちだ大福帳

タイムスケジュール

14:00開場 / 14:30「あるナの子ども達」上映 / 16:00森沢典子さんのお話「パレスチナ側から見た平和」 / 17:30休憩 パレスチナのビールとハーブティ・軽食 / 17:30「Wemen in Struggle～目線から」上映 / 18:30清未愛砂さんのお話「占領下のパレスチナ-元政治犯の女性として生きること / 19:30終了

申込 & 問合せ：042-722-4260(国際交流センター・藤代)



町田市民ホール

<http://www.m-shimin-hall.jp/>

(財)町田市文化・国際交流財団
194-0022 町田市森野2-2-36

☎042-728-4300

JR横浜線町田駅ルミネ口徒歩10分

小田急線町田駅西口改札口徒歩7分

*駐車場はありません。

●9月定例会 9月14日(金) 田井宅 13:30～

●10月号発送日9月28日(金) 田井宅 13:30～